



バトルブレイズ小説版

俺の英雄

Battle Blaze Novelize Edition -My Hero-

R-18



ヒーローに憧れる少年・赤石知輝と
その幼馴染・青嶋勇也は、部活動の帰り道で
悪の組織・イビルスに襲われてしまう。
親友の絶体絶命のピンチに、
勇也の秘められた力が覚醒し……

バトルブレイズ、その誕生の前日譚！





グラウンドいっぱい、小気味良い金属音が響いた。白球が青空に吸い込まれていくのを二塁手の少年——青嶋勇也は仰ぎ見る。これはとても追えない。打球は大きな放物線を描いて、外野手の頭も越える。相手チームのベンチからホームランを確信して歓声が上がった。マウンドで3年生のエースが崩れ落ちる。9回裏の呆気ない逆転で、勇也のチームの夏は終わった。

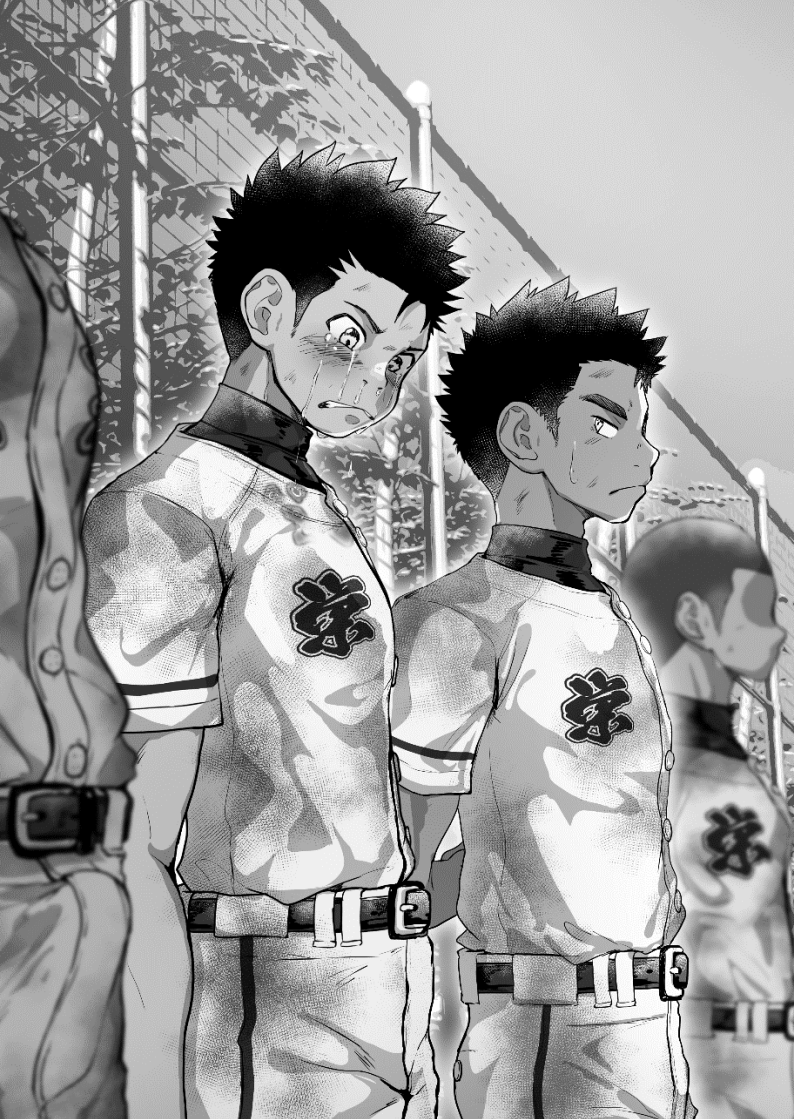
1年生でありながらレギュラーを獲得した勇也は、居た堪れない思いでミーティングに加わっていた。3年生からすれば、これが最後のミーティングとなる。先輩達が、声を押し殺してすすり泣く声が聞こえた。ここで終わるようなチームではなかった——だがしかし、現実には努力が実らないことが山程ある。やり切れない思いは、飲み込まなければならぬ。それがはっきり分かるくらいには、勇也はもう大人だった。表情を取り繕う。何でもない風を、装うことができる。早熟な彼は、周囲の部員達と比べてひどく冷めているように見えた。だから、いつも彼と仲間の

間には、壁があった。他者と打ち解けられない寂しさが、ひっそりと勇也に寄り添っている。

勇也とは対照的に、ぼろぼろと大粒の涙を流し、しきりに鼻水をすすっている遊撃手が居た。勇也は半ば呆れつつ、その幼馴染——赤石知希をこっそりと盗み見る。

（まさかと思っただけど、3年生より泣いてるな……）

驚き、そして少し呆れる。それでも、勇也の心は僅かに軽くなっていた。こんな姿を見る度に、彼は、『知希は子供っぽいし、純粹すぎる』と思う。実際そう公言して憚らない。一方で、その正直さや素直さを羨ましく思う気持ちもあった。あれこれ考えているのが、段々と馬鹿らしくなる。悲しいときに悲しいとか、悔しいときに悔しいと言えることは、何かと我慢をしてしまう彼にとって、確かに救いとなっていた。監督の話が終わり、本当に3年生が引退する。そう感じて、勇也はようやく一粒だけ涙を流すことができた。



「次のキャプテンは、瀬尾に頼もうと思う」

主将がそう言うのと、2年生でレギュラーの瀬尾誠が輪の中心に進み出た。中学2年生にしては背が高く、筋骨逞しい左翼手は固く緊張した面持ちで一礼する。この野球部は比較的髪型を自由にしてよい決まりであったが、真面目な瀬尾は頭を短く刈り上げていた。形の良い眉は太く、良く見れば男らしい顔立ちだが、元々表情が明るので凛々しさよりも親しみが先立つ。実際に人柄も良く、知希も勇也も厚く信頼している先輩だった。学校の内外にファンクラブがあるという噂もある。

「力不足で迷惑を掛けますが、一生懸命頑張ります！」

チームメイトの力強い拍手が、新しいキャプテンを迎え入れる。それでようやく、瀬尾も安心したのかほっとしたような笑みを浮かべた。人懐っこさがどうしても滲んでしまうところに、彼の愛嬌が詰まっている。頑張れよ、と3年生達が手荒く彼の頭を撫でて回る。こうして、想像よりも早すぎた代替わりは明るく、和やかな雰囲気ですべて幕を閉じた。

夕日が沈みかけ、とぼとぼと歩く2人をオレンジ色に染める。

「負けちゃったなあ〜」

帰り道、知希がそう言うのはもう3回目だった。「そうだな〜」と勇也は律義に、それでいて覇気はなく、毎回とぼけた返事をする。知希がむっとした表情で振り返った。

「身が入つとらん！身が！」

監督の口癖を真似して知希が言う。似てる、と勇也は微笑して返した。ふざけてはいるが、思いのほか真つすぐな知希の眼差しを確認し、勇也はそつと視線を外した。軽く目を閉じ、口を尖らせてみる。

「だって、しょうがないだろ。勝負は時の運だって」

「それは……そうかもしれないけど……、あんなに頑張ったのに、それじゃあ悔しいじゃんか！」

「んなこと言ってたって……」

しょうがないだろ、と勇也は繰り返した。

「どっちかは負けるんだからさ」

知希は『言い返したいけど言い返せない顔』をしている。地団駄を踏み、身体いっばいで感情を表現しているが、言葉にはならない。大きなため息を一度、長く吐く。すると、思い立ったかのように急に真顔になって、力強く勇也を指差した。

「決めた！俺は絶対来年全国行く！！」

「ぜんっぜん俺の話聞いてねえな？」

「勝負は運なんかじゃねえって証明しないと！勇也もやるんだぞ！」

どうやって、と勇也が尋ねると、知希はにっこり笑って言った。

「頑張る！」

ぐっとガッツポーズをする幼馴染に、勇也は冷たい視線を投げかけた。

「考えなし。脳筋。根性論。時代遅れ」

「ひどくね？そこまで言う？」

——まあでも、そういう奴が最後は勝つといいよな。

不貞腐れる知希を尻目に、最後の言葉はそっと飲み込む。自分ではなく、知希の

ように真つすぐな友人の願いが叶ってほしい。勇也がそう心から思った時、誰にも気づかれることなく、身体から蒼い光が小さく迸った。

赤石知希の朝は早い。最大音量のアラームを止め、大きく伸びをすると、寝間着代わりのジャージのままストレッチを始める。靴下を履いて、家族を起こさないように家を出た。スニーカーの紐を締め直し、軽く息切れするくらいのペースでランニングする。ちょうど昇ったばかりの朝日が、野球少年の全身を照らす。日差しから、今日も暑くなると彼は思った。ゆったり30分かけて6キロを走り終える。手早くシャワーを浴びた後、自分でトーストとサラダを用意する。ようやくその頃になつて、家族みんなが起き出してくる。誰かがテレビを点けたのか、ニュースが流れていた。

『昨晚、××県○○町で指定ヴィラン組織である『イビルス』による破壊工作がありました。国家公認の治安維持組織である『ルクス』からヒーロー・バトルライトニングが出勤し、既に騒動は鎮圧されたとのことです』

「やだ隣町じゃない。あんた部活終わったら早く帰って来なさいよ」

母親の言葉に、知希は生返事で答えた。テレビでは、煙を上げる建物と、インタビュに答えるヒーローの姿が映っていた。

『今回は少し到着が遅れてしまい、建造物に被害が出てしまいました。人的被害がなかったのは、不幸中の幸いですが』

ヒーローは、鍛えた体を縮こまらせて申し訳なさそうに述べていた。ルクスギアと呼ばれるゴーグルによって目線が隠されており、顔や表情は完全には分からないが、まだ年若いようである。

(ヒーロー、カッコいいなあ……)

知希は昔から、ヒーローに憧れていた。それこそ、まだヒーローが特撮と呼ばれる子供向けドラマの1ジャンルである頃から、ファンだった。

事情が変わったのはほんの数年前だった。『イビルス』に代表されるような、現代科学を超越する力を悪用し、人々に害を成す指定ウイルス組織が突如出現したのだ。同時に、それに対抗するように一般の市民の中から超人的な力を持つ者が現れ、徒党を組んで平和を守ろうとした。これが『ルクス』と呼ばれるヒーロー達の組織

である。研究の結果、ヒーロー達の超人的な力はルクス遺伝子と呼ばれる特別な生理的要因によって発生していることが突き止められた。どのような要因でルクス遺伝子が発現するかは未知であるが、ヒーロー達は特殊なスーツによってそのエナジを増幅させることでヴィラン達に対抗し、彼らの蛮行を制圧・抑止している。現在、どちらかと言えばルクスが優勢であり、ヴィランの活動は停滞、縮小傾向にあると言われている。このように、ニュースでの報道も日常茶飯事であるが、市民はさほど不安がることも無かった。ヒーローという存在が、すっかり定着したことの表れでもある。

『ヴィランの蛮行にはルクスが駆けつけ、皆様の生活を守ります。ご安心ください！』

にっこりと笑顔の口元、ガッツポーズでスーツを盛り上げる逞しい肉体。知希はしみじみとヒーローのカッコよさを堪能してから、家を出た。

家から学校までの最初の曲がり角で、ほとんどの場合、知希は勇也と出くわす。

よっ、と勇也が彼に手を上げて話し掛けた。

「……またヒーローのニュース見てたんだろ」

「うん。ライトニング、カッコよかったなあ。隣町だから、まだ近くにいるのかな。生ヒーロー見たいなあ」

「部活だろ」

「……分かってるよ」

幼馴染の勇也からすれば、これも『お馴染みの』光景だった。知希のヒーロー好きは今に始まったことではない。

——そりゃあ俺も、昔は好きだったけどさ。

勇也も特撮ヒーローは熱心に観ていた方である。しかし、年齢が上がるにつれてどうにも幼稚っぽく感じるようになった。実際にヒーローとヴィランが出現した現在にあっても、ヒーローに憧れるという感覚はかなり縁遠いものとなっている。警察官や消防士に対する「すごい仕事だなあ」程度の感覚だ。未だにヒーローとなると目を輝かせる幼馴染を見て、ちよつと呆れる。

「お前まだヒーローになりたいとか言ってるのか？」

「え？全然なりたくないけど？カッコいいじゃん。『ご安心ください！』ってみんなに言ってる、すげえ力で悪い奴やつつけて……」

瞬く間に妄想を広げる知希に、勇也は肩を竦めた。どうやら本気らしい。

「いや……こんなこと言うとおれだけど、やっぱり甲子園にも出たいし……でもヒーローの訓練は早くから始めないといけないし……」

「……そりゃあ、ずいぶん贅沢なお悩みで」

知希はそんな皮肉にはびくともしないし、それもあつて勇也は気兼ねなくこんなことを言える。

（でも本当は——）

知希にとつて、甲子園に行けそうなのも、ヒーローになれそうなのも、相応しいのは勇也だった。野球の腕前で負ける気はないが、どちらかをレギュラーに入れるとなれば、みんなは勇也を選ぶと思う。知希だって、そうする。理由はいくつかあった。運動神経が良いこと。プレーが落ち着いていること。感情的にならないこと



——自分は勇也に比べて足りないところが多すぎる。

ヒーローに素質というものがあるのかは分からないが、困っているチームメイトや級友に気づくのはいつも勇也だった。口は悪いが、周囲を客観視しているだけに、視野が広い。ともすれば、知希は自分のことで精一杯なことがある。勇也のように、人に手を差し伸べる余裕はない——何でもそつなく、正しくこなすことができる幼馴染にはどうしたって敵わない。そんな思いが、彼にはあった。

——だからって、諦める訳じゃないけれど。

そのひたむきさが一番の武器であることに、知希はまだ気づかないでいる。

その日、野球部の練習は苛烈を極めた。基礎トレに始まり、素振り、ラントレ、ノックとハードなメニューが続く。大会直後であり、次の公式試合まで間隔が開くこのタイミングで、部員全体の地力の底上げを図る方針だった。何よりも、3年生の敗北と引退が野球部全体の空気を引き締めていた。新キャプテンの瀬尾が檄を飛ばし、自らも一番負荷の高いトレーニングをこなしていく。知希と勇也はレギュラー入りしていたこともあって、部員達の中でも一際真剣に練習に取り組んでいる。汗と泥で全身がどろどろになり、グラウンドにトンボを掛ける頃には、夕日が沈みかけていた。

「今日はかなり気合入ってたな。お疲れ」

知希と勇也に声を掛けたのは瀬尾だった。にっこりと笑うキャプテンは、練習の時とは打って変わって優しい。二人とも嬉しくなっていて、ぺこりと頭を下げた。

「隣町で悪い奴ら出たららしいから、あんまり帰んの遅くなるなよ！」

瀬尾が大声でそう呼び掛けると、部員達が口々に返事を返した。着替えをし、三々五々に下校していく。

「疲れた〜」

さすがの知希も帰り道では弱音を吐く。傍らの勇也は言葉こそ発さなかったが、表情や足取りはぐったりとしている。汗を拭いても、制服に着替えるのはためらわれ、2人とも練習着のまま帰路に着いたところだった。疲労から、沈黙が続きがちの中、出し抜けて知希が言う。

「……なあ、折角だからもうちょっとトレーニングして行かね？」

いきなりの提案に、勇也は驚きを隠せない。

「はあ?! マジかよ?!」

「だって、みんなと同じ量練習してもしょうがないだろ! まだ練習着だし、筋トレでも素振りでもやってから帰ろうぜ」

無理なトレーニングは身体を壊す、という発想がないのかもしれない。そう勇也は思った。



「本物の脳筋かよ」

「聞こえない聞こえない！俺一人でもやるもんね！」

それはやっぱり癩だったので、勇也もしぶしぶ付き合うことになる。彼は溜息をついた。

「どこでやる？」

「そうこなくっちゃ。河川敷だと暗すぎるかな」

知希がそう言ったとき、脈絡なく軽い衝撃が右腕に走った。

「えっ？」

反射的に疑問の声を上げたのは、右手の路地の暗がりからにゅっと腕だけが突き出て、しっかりと知希の右腕を掴んでいたからだ。中空の腕はびったりとした黒い皮膚に指先まで覆われており、遅しい。大人の男のものだろうと思わせた。ぐつと力が入り、知希を路地に引き込もうとする。知希はもちろん抵抗したが、常人の力とは思えない強さであっさりと身体ごと持っていかれてしまう。

「知希！」

勇也が叫んだ瞬間、知希の姿は魔法のようにするりと消えた。引かれた路地を見遣っても、腕も、幼馴染もない。目の前で神隠しが起こったとしか思えない。そんな非科学的なことがあるか、と考えた時によく勇也は思い至る——超常の力を持つヴィランが、知希を連れ去ったのかもしれない、と。携帯を取り出し、ルクスの非常ダイヤルをプッシュしかけたその瞬間、再び中空から黒い手が出現し、強かに勇也の掌を打った。かしゅん、と音を立てて携帯がアスファルトに落ちる。そのついでと言わんばかりの荒っぽさで、勇也の腕も謎の手ががっしりと痛いほど鷲掴みにされた。

「離せっ！！」

腕を振り解こうとしても、万力のような握力でびくともしなかった。ぐいと引っ張られ、勇也はよろけてしまう。目には見えない薄い壁のようなものを通り抜けた——そんな妙な感覚が全身を通り過ぎる。すると、目の前に自分を掴んでいた者の正体——黒いタイトなスーツで全身を包んだ、屈強な男——テレビでしか見たことがなかったが、ヴィラン組織の戦闘員であることが分かった。戦闘員の着るスーツ

は、改造された逞しい肉体のボディラインを——乳首や股間までも——恥ずかしくなるほど露わにしており、ルクスのヒーロー達とは似て非なるものである。身体の中で顔だけは露出しているが、ルクスギアとよく似た真っ黒なモノアイのゴーグルで、顔の大部分は隠れている。口元は油断なく引き締まっており、異様な姿と相まって、人間らしさが欠落していた。それでも、この戦闘員がそれほど自分達と変わらない——せいぜい、高校生くらいの年齢であることが察せられる。

「勇也っ!」

戦闘員の奥に、他の戦闘員によって羽交い絞めにされていた知希が見えた。力いっばい身体を動かそうとするが、戦闘員の恐るべき臂力で全く逃れることができない。

「知希!大丈夫か!うわっ?!」

あっさり掴んだ手を捻られ、勇也もまた戦闘員によって羽交い絞めにされてしま

う。
「いてててて!何すんだよ!」

勇也が怒鳴りつけても、戦闘員は全く言葉を発さない。身体を密着させられると、戦闘員の体温が背中や股座からじつとりと伝わってきて不快だった。

「元気がいいね」

勇也たちが引き込まれた路地の向かい側から、やはり突然、男達が現れる——数は3人だった。2人は、今、少年たちを拘束している戦闘員と同じ種類の雑兵である。それを引き連れるように、戦闘員のスーツの上から大きな白衣を羽織った男が居た。ゴーグルの代わりに太い黒縁の眼鏡を掛けており、髪はぼさぼさ、年齢は20代前半といったところだろう。声を出したのも、この男だとすぐに分かった——それで、この戦闘員達のリーダーであることが知れる。

「ここはどこなんだ?……俺達を、どうする気だ?」

努めて冷静に、勇也が尋ねる。白衣は言葉を発しても良いらしく、驚くほど穏やかな声で答えた。

「ここは、さつき君達が見ていた路地さ。『カメレオン』という兵器で音響遮断と光学迷彩を一定範囲に与えて、周りから僕達の存在を隠しているだけ」

ほかんとした表情の知希に、バリアみたいなものだよ、と白衣の男は説明し直す。勇也は、敵ながらマメな奴だと思った。

「どうする気かというと、赤石知希さんと青嶋勇也くん、君達是我ら『イビルス』に選ばれたんだ。二次性徴真っ只中の素体は貴重でね。いま、君達を戦闘員にすれば遺伝子型に沿った最適な改造が施せる……ちようど、ここにいる彼らのようにね」
——俺達を、戦闘員にする？

荒唐無稽と笑い飛ばすには状況が悪かった。少年達を羽交い絞めに行っている男達こそ、正に『イビルス』に改造された戦闘員なのだ。

「ふざけんな！なるわけねえだろ！！」

知希が吼える。しかし、白衣の戦闘員は余裕の表情を崩さなかった。こういうやり取りに、慣れているのだろう。

「そう？僕としては手荒なことはしたくないから、素直に従ってほしかったんだけどな——じゃあ、124号」

「はっ！」

勇也を羽交い絞めにしていた戦闘員——124号が、軍人のように短く、それでいて威勢よく応答した。

「イビルスギア解除許可。自分がどんな風に戦闘員に改造されたか、教えてあげよう。聞けば諦めてくれるかもしれないから」

「124号、了解。イビルスギア解除します……人格〈ペルソナ〉モード優位に移行……へへっ、ミオ様ありがとうございます。やっぱ兵士〈ソルジャー〉モードは肩凝っちゃうんで、助かります」

宣言と共に124号の目を覆っていたバイザーが分解され、消える。釣り目で一重の、気の強そうな顔がバイザーの下から現れた。今までの無表情を一転させ、にやにやと笑みを見せる。勇也も知希も、戦闘員という無個性の存在が顔や表情を取り戻したことで、ありありと戦闘員124号が一個の人間であることを認識する。それが、戦闘員に改造された者の末路を嫌でもはつきりと実感させられ、強気な態度が揺らいでいく。

「それじゃあ、君が戦闘員に改造されたのはいつかな？」



「俺が『イビルス』の戦闘員にしていたのは2年前、15歳の頃です。剣道の帰り道で拉致られて、基地で洗脳処置を受けました」

「抵抗した？」

「はい。今のこいつらみてえに、めっちゃめっちゃ抵抗しました……でも、全部無駄でした。『イビルス』の技術とイビルロード様のお力の前では、俺は全くの無力でした。頭も心も体も、毎日ぐっちゃぐちゃに犯されて……俺は戦闘員124号に改造されました」

男は、自分が悪の組織に洗脳され、改造されたことを嬉々として語った。勇也は、124号の身体がじつとりと熱を帯び始めるのを感じた。自身の言葉で、高揚——いや、興奮しているのである。背中にごりごりと硬い肉棒が当たる。勃起していることを隠しめせず、124号は勇也にそれを伝えるかのように、背部に押し付けた。「どんな風に改造されたのか、二人にも分かるように説明してくれるかな」

「まず、身体の中のエナジーを全部出すために、金玉の中を空っぽにさせられました。媚薬と洗脳の影響で、その頃にはオナニー狂いの猿みてえになってたと思いま

す。その後、他の戦闘員に囲まれて毎日廻されました。イビルエナジーが俺の全身に巡って、イビルロード様の『色』に俺が染め上げられていく……もう二度と経験できねえのが惜しいくらい、最高の快感でした。剣道やってた時は最悪だった汗臭え身体も、洗脳されていく内にハマっちゃまって……その後、自分でもイビルエナジーが『定着』する瞬間が来たのが分かりました。先輩達とおんなじ、真っ黒なザーメンが俺のチンポから潮みたくに噴き上がって……人間辞めて、マジで戦闘員にされちまったんだなって、思いました。その時はもう、完全に洗脳されてたんで、嬉しさがなくなかったです。先輩と同じスーツ姿になって、イビルスギア付けて最終調整されて、俺は完成しました」

「素晴らしい。よく分かってもらえたと思うよ。ありがとう」

性的な話に面食らったというのもあるが、124号の『戦闘員に堕ちた過程』を聞いて、2人の少年は完全に怯えており、それはミオと呼ばれた白衣の男の目論見通りであった——素直に言うことを聞かずとも、抵抗を抑止することができれば良い。イビルスギアの装着を124号に命じると、彼はにやけ笑いを引っ込め、また

無表情で無個性の戦闘員に戻った。ギンギンに勃起した股間だけが、彼の興奮の残滓を伝えている。

「さ、すっかり落ち着いたことだしやりますかね」

ミオは白衣のポケットから片手よりも少し大きい器械を取り出した。小型のボウガンと注射器を足したような形状をしており、矢の部分がシリンダー状になっている。

(うるさかった赤石君の方からやるか)

つかつかと知希の方に彼は近寄る。恐怖をありありと表情に残したまま、知希は身をよじった。

「何するんだよ……や、やめろよつ、やめろー!!」

「何するかは聞いていただろ。まあでも、これは新作だね。124号とは違う方法で君を改造してみたいんだ」

額に狙いを定めて、矢の先端をびったりと押し付ける。本当は矢が飛ばせたら良いのだが、ある程度決まった位置に当てる必要があった。

「おい！知希に手を出すな！！俺を先にやれ！！」

勇也が喉も涸れんばかりに叫んだ。空気が震えるほどの大声に、一瞬、ミオの手が止まる。

「——友達思いだね。でもすぐ君もおんなじになるから大丈夫だよ」

「やめろおおおおおッ！！」

サイレンサーの付いた、鈍い発射音が勇也の悲鳴に紛れて聞こえた。知希の額の真ん中に、一瞬、鋭い痛みが走る。ボウガンの機構は役目を果たし、シリンドーを押し込んで先端の機材を皮膚下に押し入れる。同時に、矢の先端に仕込まれていた熱源が皮膚を焼き、出血を瞬く間に止めた。

「があッ、うっ、あああッ……………」

「知希ッ！！」

獣のように唸り、知希は額を押さえる。ミオが手で指示をして、知希を拘束していた戦闘員が腕を離し、後ずさった。身体が自由になった知希は、それでも、逃げたり、抵抗したりせずにいる。勇也は、その様子に違和感を覚えた。何もしないの

